# 秋月藩御用絵師・齋藤秋圃が有田皿山に残した絵画

当館ではお隣の福岡・秋月藩の御用絵師であった齋藤秋圃（明和５年？～安政６年）が描いた屏風６曲１双を２件、寄贈資料として収蔵しています。１件は白川の窯焼きであった久保時太郎家のご子孫から寄贈を受け、もう１件は明治９年建設の異人館旧所蔵者である田代家から寄贈されたものです。

それぞれ、「四季耕作図」と鹿の群れを描いたものですが、齋藤秋圃の絵はこのほかに町内では陶山神社の拝殿に掲げられている絵馬「油坊主」と、もう１つは桂雲寺の「寒山拾得」など3幅の掛け軸が現在までに確認されています。

陶山神社の絵馬には嘉永元年の年号と、それを奉納したと思われる後藤祐哲、久冨才助などの名と共に「七十有八　秋圃」の作者名が記されています。同じく、桂雲寺の軸装にはそれぞれ「七十有八　秋圃」などとあります。当館蔵の屏風の鹿の図には「行年八十二歳土筆翁秋圃」とあり、また「四季耕作図」には「八十三齢土筆翁秋圃」という描いた時の年齢と作者名が記されています。

ところで、この齋藤秋圃という人物はどんな絵師だったのでしょうか。秋圃研究を続けていらっしゃる近畿大学の橋冨博喜先生によれば、その絵画修業時代のことはほとんど伝わっておらず、一説には円山応挙に師事し、応挙没後は森狙仙にならったと伝わっているとのことです。

４月半ば、秋圃の子孫（秋圃から数えて６代目）の齋藤仲道さんらが当館を訪れ、先祖が描いた絵画と再会されました。初めてご覧いただいた皆様は一様に、その絵の力強さや細かな観察力に感動されていました。この子孫の方々がどうやって当館所蔵の先祖が描いた絵画にたどり着かれたかというと、現在文化財課で進めている異人館修復事業にその端を発してのことでした。

昨年、田代家から古文書や屏風などの資料を寄贈いただき、今後の展示に活用しようと考えていた中で、異人館活用検討委員会の委員でもある工藤卓前近畿大学教授に齋藤秋圃が描いたものが有田に残っていることをお話しました。するととても驚かれました。そのわけをお尋ねしたところ、なんと、工藤先生は太宰府市にある齋藤家の保存計画に関わっていらっしゃったとのこと。早速、齋藤家にこのことを伝えられたそうで、子孫の方が是非ともそれらを見てみたいと希望され、当館まで案内いただいたという次第です。

恐らく、秋圃はこの有田を何度となく訪れ、しばらく滞在しながら有力窯焼きの家などで屏風を描き、また陶山神社へ奉納する絵馬などを手がけたのではないでしょうか。長崎では天保５年の銘がある高島秋帆書・齋藤秋圃図「染付猩猩宴文鉢」の亀山焼が確認されています（長崎市歴史民俗資料館だよりNo.102）。もしかすると、この有田でも焼物の絵付けを行ったかもしれませんが、残念ながら現在まで確認できていません。

（尾﨑　葉子）

季刊 皿山 No.110 夏 2016

有田町歴史民俗資料館・館報

# 12年に一度の祭り「さんのう祭」が行われました

陶器市が終り、有田の町にいつもの静寂な日々が戻ってきた5月22日㈰、中樽地区と上幸平地区の住民の方々が中心となって行われるさんのんさん､｢山王祭｣(松本直大祭礼委員長)が行われました。

これは12年に一度、申年に行われるもので、その起源はよくわかりませんが、少なくとも昭和７年の申年には行われたことが確認できます。それは上幸平に住んでいたお産婆さんの古賀トヨさんが残した昭和７年５月23日㈪の日記に下記のように記されています。

「今日は山王祭に立派な天気である。お猿を下げたり幕を張ったりして山王様で揃って上幸平を一巡して中樽に行き、それから帰って町を廻る」

と、祭り当日の様子を伝えています。また、祭り前日の22日には娘さんの二〇加（にわか）着を裁って縫い上げ、その日の午後、衣装揃えが行われ、夜にはそれ以前から続く踊りの練習を行っています。

さらに驚くことに戦争真っ只中の昭和19年5月20日㈯にもこの祭りは行われていることが日記からわかりました。当日はあいにくの雨模様でしたが、猿を家の戸口に吊るして飾り、余興の一つとして子ども相撲があったことも記されています。

これまで昭和31年、同43年、平成４年、同16年と一度も絶えることなく両区民の皆さんが続けてこられました。中でも昭和31年の祭りは、当時の有田町公民館の職員が撮影したと思われるモノクロの映像が残っていて、賑やかな風景を見ることができます。神の使いである申（猿）ですが、上幸平の山王神社には初代松本佩山作の白磁像が、中樽の瀬戸口家に隣接する山王社には石造の猿が鎮座しています。

祭りは神事が行われたあと、上幸平の猿を神輿に担ぎ、区民の皆様が踊りながら中樽へと向かいます。祭りの縁起はよくわかりませんが、いずれにしても陶業の振興と五穀豊穣を願う祭りといわれています。ただ、何故、主として中樽と上幸平の住民だけで行うようになったか、いつ頃から始まったかなどの詳細は不明ながらも、両区の女性たちは２年前から、２区公民館で「さげもん」という、カラフルな布で作った小さなお猿さんの人形を手作りしてきました。以前も女性たちが人形を手作りされていましたが、今回は特に有田焼創業400年という記念すべき年に行うということで、意気込みもこれまでに増して盛り上がり、一つの輪っかに30体の人形を下げ、区内の約400世帯の軒先を飾りました。

陶器市が終った後に､本格的な踊りの練習が始まり、昨年のおくんち当番区の勢いそのまま、練習も熱気を帯びて短時間で行われたそうです。

祭り当日は朝から青空が広がり暑いほどでした。まず上幸平の山王神社で神事を行い、その後中樽に向かってお使いの猿が少年少女たちによって神輿に担がれ、その後を稚児行列や男子部・女子部、黒髪会という女性たちも踊りを披露しながら町中を遷御巡行しました。

中樽の山王社にはわずか１時間ほどという短い滞在でしたが、お猿さんはまた上幸平へと還御し、区民総出の祭りも賑やかに無事終了しました。昨今は地域のコミュニティ力が減りつつあるといわれますが、改めて２区の皆様の団結力を見せられた一日となりました。

次のさんのう祭りは平成40年（2028）です。

# 「染付有田皿山職人尽し絵図大皿」の登場人物が動き始めました

昭和29年に開館した有田陶磁美術館の看板娘で、佐賀県重要文化財に指定されている「染付有田皿山職人尽し絵図大皿」には37人の老若男女や、陶石や薪などの物資を運搬している牛馬、それと窯元の家で飼われていた犬や猫までもが一枚の皿に描かれています。それらの職人さんらが江戸時代の有田焼製造の工程を生き生きと伝えていて、この画像から現在の我々は先人たちの営みを知ることができます。

しかも、描いた職人さんはこの有田皿山の絵かき職人の一人と思われ、各工程を正確に表現しています。私どもは長年、これらの登場人物が動き出すことで、有田焼のことを全く知らない方も、また子どもたちにも理解してもらえるのではないかと考えていました。

そのような中、昨年度、有田皿山職人尽し絵図大皿アニメーション化事業委員会（松尾佳昭委員長）を立ち上げ、委員には鈴田由紀夫九州陶磁文化館館長、百武龍太郎佐賀県陶磁器工業協同組合専務と有田町役場のまちづくり課、文化財課の職員が加わりました。

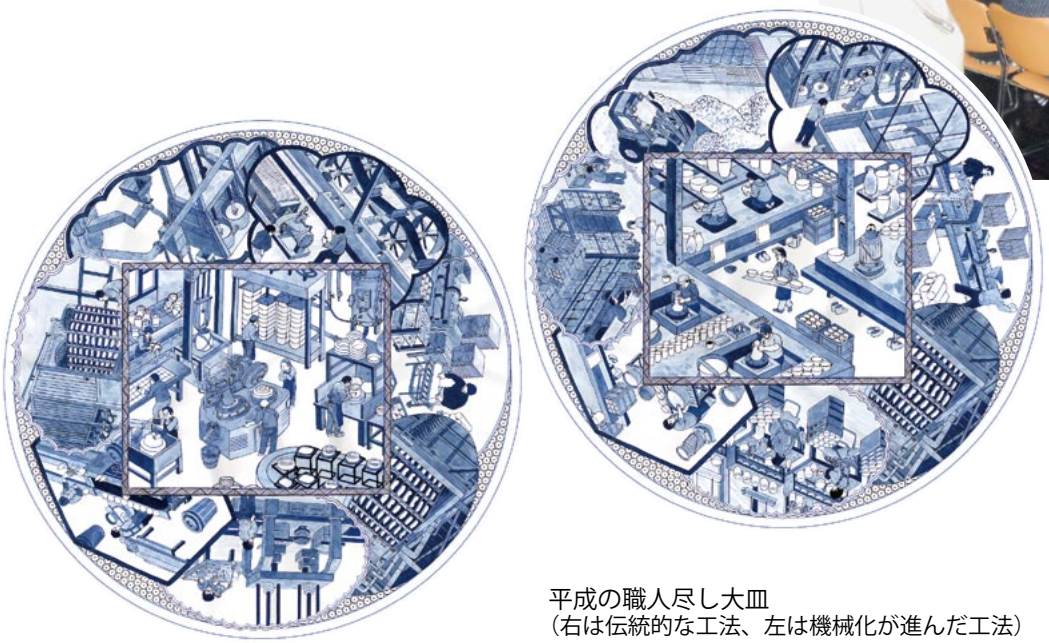
事業を委託した業者（佐賀市・とっぺん）の皆さんにはたびたび有田町まで足を運んでいただき、委員会のメンバーと意見交換を行いながら作業を進めました。また、江戸時代の職人尽し大皿のアニメーション化と併行して、これからの50年、100年後の人々に、平成の時代の有田焼製造工程を伝えるための映像も撮影しました。

現在は伝統的な製作と機械化されたものと大きく２つに分けることができますので、各窯元や工場などの現場で働く職人さんの姿を撮影し、その場面ごとにアニメーションの江戸期の職人さんが現れてその違いのすごさに感想を述べる形で映像が出来上がりました。

さらに、この映像をもとに原画を作り、江戸期のものと対比できるような「平成の職人尽し大皿」を職人さんに手書きで描いてもらい、大皿2枚が完成しました。これも、伝統的な製作工程と機械化が進んだ製作風景が描かれています。

現在、大樽にあります有田陶磁美術館に於いて、江戸期の大皿と平成の大皿2点を並べて展示し、展示室内でアニメーション等の映像も流しています。公開初日を陶器市の開会に合わせて行いましたが、5日までの間に国内外の方々に楽しんでいただきました。中には「このDVDは販売しないのか？」というお尋ねもありましたが、残念ながら交付金事業で行ったので販売することはできません。ただ、今後は町内外の各所でこの映像をご覧いただく機会を増やして、有田焼の歴史や製作工程の変遷などを実感していただきたいと考えています。

まだ見ていないという方はぜひ一度ご覧ください。



平成の職人尽し大皿
（右は伝統的な工法、左は機械化が進んだ工法）

- 公開場所
  有田陶磁美術館（大樽）
  （当分の間）
- 開館時間
  午前９時～午後4時30分
  月曜日は休館
- 入館料
  大人100円、大高生50円
  小中生30円

## 書籍紹介「先哲の人生に学ぶ～現実主義者の選択」

先日、この本の著者である松本正氏より恵贈いただきました。帯には「歴史に埋もれてきた3人の先哲は、冷徹に現実を見据えて自国の進路を計算した」とあり、シャム（現在のタイ）のモンクリット国王（「王様と私」のモデル）、イングランドの初代ハリファクス公爵と共に、大分・杵築出身で旧日本海軍の堀悌吉中将が紹介されています。

中でも、堀悌吉中将は山本五十六・古賀峯一両元帥と若い頃より親交があり、生涯にわたって変わらぬ友情を育んだといわれています。古賀元帥が有田出身であることは皆様よくご存知だと思いますが、松本さんはできるだけ史実に忠実に記し、見解（評論）も入れたとのことです。残された資料から「古賀元帥は当時の軍人にはめずらしい民主主義者だった」とし「ヒトラーのナチス・ドイツやベトニ・ムソリーニのファシスト・イタリアを自由と議会制民主主義に対する真の敵と考えて」おり、歴史の流れから「内乱で国が滅びたことはない。国が滅びるのは外国との戦争である。だから、あの時の要路の責任者は、内乱を恐れずに断乎として開戦を抑止すべきであった」と太平洋戦争開戦直後に慨嘆したそうです。

- 書名　「現実主義者の選択」
- 著者　松本正
- 発行年月日　2016年4月7日
- 発行所　ホルス出版
- 定価　1500円（税別）

**〔古賀峯一元帥慰霊祭〕**

古賀元帥は山本元帥に引き続き1944年（昭和19）3月下旬、中部太平洋上を飛行艇で移動中、行方不明になりましたが、毎年有田町では慰霊祭が行われています。今年は５月14日㈯に陶山神社境内の古賀峯一元帥之碑前で古賀峯一元帥顕彰会（井上萬二会長）が主催され、関係者220人が参列されました。

井上会長は、堀悌吉氏が書き残した「五峯録」を紹介し、「日本の繁栄は尊い犠牲の上になり立っていることを忘れず、平和が続くように」と式辞を述べられました。

## 新人紹介

新しくこの４月から文化財課の職員（学芸員）として伊達惇一朗が加わりました。主として埋蔵文化財を担当します。出身は神奈川県ですが、縁あって九州の地に落ち着きました。

早速、４月には曲川小学校より子ども達に縄文時代の生活体験をさせたいということで、派遣依頼があり火起し体験を指導しました。残念ながら、火種が出来る所まではできたものの、火を起すことはできなかったそうですが、改めて縄文時代の人々は火ひとつ起すためにどれだけ苦労したかを経験してもらったのではないでしょうか。

これからは西地区の国見山ろくを住処とした縄文人や旧石器時代のことも対応できるようになりましたので、どんどんご利用ください。

また、先日の陶器市初日には他の役場新人職員と共に、会場内のパレードを行いました。新聞各紙でも紹介されていましたので、すでに気づかれた方もいらっしゃるのではないかと思いますが、今後ともよろしくお願いいたします。

伊達惇一朗

**季　刊　『皿　山』**

**通巻 110 号（平成 28 年６月１日）**

**編集・発行　有田町歴史民俗資料館**

〒 844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山１丁目 4-1

☎ 0955-43-2678　FAX0955-43-4185

URL：http://www.town.arita.lg.jp/main/169.html